

## 教職課程履修学生のいじめ状況認識 — 2000年・2001年調査

森住 宜司<sup>1)</sup>

### **Bully/Victim Problems and the Students of a Teaching Profession Course: Their Present View on Bullying Researched in 2000 and 2001.**

Takashi Morizumi<sup>1)</sup>

#### 要約：

本論文は、教職課程履修学生の、小・中・高校時代に経験したいじめ認知、加害・被害経験、現在のいじめの発生状況認識・今後の推移評価、いじめ報道に対する関心、情報への対応について2000・2001年に調査し、その結果を1997～1999年調査結果と比較しながら検討したものである。2000・2001年調査においても1997年調査と同様に、学級内でのいじめ認知やいじめ加害も多くの学生が報告した。ただし、いじめ被害経験はこれまでの調査結果と同じく多かったが、いじめ加害も小学校段階であるが少なくない学生が経験していた。2000年と2001年を合わせた分析結果では、森住（2005）同様、いじめ発生の現状を約60%（1997年調査では70%弱）の学生が多いと認識し、30%弱（森住（2005）では40%弱）の学生が今後も増えると評価した。

キーワード：いじめ、教職課程、現状認知、加害・被害経験、推移評価

#### 1. はじめに

教職課程履修学生のいじめ問題認識に関して森住（2004）<sup>[1]</sup>と森住（2005）<sup>[2]</sup>は、過去のいじめの認知と被害・加害経験と現在のいじめ問題に対する関心などを調査した。本研究は、1997年に始まるこの調査を2000年および2001年に実施した結果を分析、検討するものである。2000年調査が対象とする主な学生は、1990年度が小学校5年、1992年度が中学校1年、1995年度が高校1年の学校生活を送っている。したがって、今回分析する2000年調査および2001年調査の対象学生は、1985年は小学校入学前年、1年、1995年は高校1、2年にあたる。1985年は、小学校入学前後でいじめ問題が社会問題化した時期で、その後「いじめ減少傾向」が報道されたが対応は学校レベルにとどまった。1994年、1995年に再び「いじめ自殺」が相次いで報道されたのが中学3年から高校1年にかけての時期で

ある。10年を置いていじめが社会問題化するその間を小学生および中学生として学校生活を送ったと考えられる教職課程履修学生のいじめ問題に対する認識を調査するのが本研究である。

#### 2. 教職課程履修学生の「いじめ」問題認識

##### 2.1 目的

本調査は、教職課程履修学生が「いじめ」状況をどう認知し理解しているかを検討するもので、ここでは1997年調査同様、「いじめ」を「精神的にまたは心身共に一方的に相手を痛めつけるような行動」<sup>[3]</sup>として調査し、分析検討する。

##### 2.2 方法

2000年調査では、国立T大学で教職課程科目「教育相談」を受講する1996年度入学で主として第3学年在籍の男女学生に対して調査を実施した。調査日時は主なものは1998年8月下旬であった。2001年調査も1年ずれたかたちで同様に実施した。調

1) 浦和大学総合福祉学部

Faculty of Comprehensive Welfare, Urawa University

Table 1 いじめ学級内認知、被害・加害経験の5年間（1997調査～）

1-1 いじめ学級内認知（1995年度入学生～1999年度入学生）

	小学校	中学1年	中学2年	中学3年	高 校	%
95年度計	64.2	45.9	39.6	30.8	8.8	
96年度計	62.2	36.7	40.8	38.8	10.2	
97年度計	67.6	45.4	38.0	32.4	13.9	
98年男女	65.7	40.6	25.2	22.4	8.4	
99年男女	72.4	49.3	35.8	31.3	16.4	

『日本のいじめ』見聞経験

小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	%
17.4	21.3	19.0	18.5	12.4	

1-2 いじめ被害経験（1995年度入学生～1999年度入学生）

	小学校	中学1年	中学2年	中学3年	高 校	%
95年度計	15.1	6.3	5.0	3.8	0.0	
96年度計	25.5	9.2	10.2	3.1	1.0	
97年度計	11.1	6.5	3.7	2.8	1.9	
98年男女	19.6	8.4	4.9	3.5	2.1	
99年男女	17.9	4.5	4.5	3.0	1.5	

『日本のいじめ』被害経験

小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	%
20.4	16.4	14.2	12.9	9.0	

1-3 いじめ加害経験（1995年度入学生～1997年度入学生）

	小学校	中学1年	中学2年	中学3年	高 校	%
95年度計	28.3	9.4	6.9	6.3	0.6	
96年度計	25.5	9.2	10.2	3.1	1.0	
97年度計	36.1	18.5	11.1	8.3	3.7	
98年男女	33.6	16.1	10.5	5.6	3.5	
99年男女	37.3	15.7	6.7	5.2	3.7	

『日本のいじめ』加害経験

小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	%
19.3	24.9	18.7	16.4	11.1	

1-4 入学年度別・専攻別の被験者数（1995～1997年度）

	芸術系	体育系	理科系	その他	合 計
95年度計	17人	97人	28人	17人	159人
96年度計	19人	62人	13人	4人	98人
97年度計	18人	79人	10人	3人	108人
98年男女	21人	117人	3人	2人	143人
99年男女	42人	104人	7人	2人	134人
98・99小計	63人	221人	10人	4人	277人
割合	15.2	79.8	3.6	1.4	% (277人)

査人数は2000年調査では143人（女子学生55人、男子学生88人）、2001年調査では、134人（女子学生51人、男子学生83人）であった。

調査項目は以下のとおりである。<sup>[4]</sup>

- Q1 「小・中・高時代に、学級内で『いじめ』があったか」
- Q2 「いじめがあった場合、その手段は？」
- Q3 「学級担任は解決のためにそれを取り上げたか」
- Q4 「担任は、どんな方法で対処し、解決したか」
- Q5 「『いじめ』発生の現状について」
- Q6 「今後の『いじめ』推移について」
- Q7 「『いじめ』問題報道への関心」
- Q8 「『いじめ』問題の報道・情報の受け止め方」
- Q9 「いじめに対する教師の対応の正誤」

2.3 結 果

Q1 「小・中・高校時代の学級内での『いじめ』の認知」

1998年度および1999年度入学学生の学級内『いじめ』認知の割合等について、男女合わせたデータ分析結果を1995年度入学生以降のものと共に記したのがTable 1である。1997年実施の全国的社会学調査<sup>[5]</sup>結果も『日本のいじめ』見聞経験等として記してある。Table 1-1は、1995年度入学生から1999年度入学生までの学級内での「いじめ」認知率であるが、1995年度入学生とほぼ同様の率を1998年度入学生、1999年度入学生とも示していた。ただ、1999年度入学生の小学校および中学1年のいじめ認知率が高く、中学2年、3年では他年度の中間的な数値（31～36%）で、高校では他年度より高いという点が特徴的であった。

Table 1-2およびTable 1-3は、いじめ被害と加害の5年間の経験率で、被害経験では1996年度入学生ほどではないが1998年度、1999年度入学生とも小学校時代が相対的に多い。いじめ加害経験では、1996年度同様1998年度入学生では小学校から中学校2年まで加害経験率が高く、1999年度入学生では小学校および中学1年が高かった。なお、Table 1-4は、調査対象者の在籍専攻別・取得科目別の割合で、体育系学生が多いことは上記の特徴に関して留意すべき点である。

次にTable 2であるが、これは2000年調査と2001年調査の対象者を合わせて（以下、両年の調査結果を合わせた女子学生105人、男子学生170人、合計275人のデータ）、その学級内いじめ認知、およびいじめ被害経験と加害経験の割合を記したものである。まず、Table 2-1にある学級内のいじめ認知率であるが、中学1年40%、中学2年31%、中学3年30%と、中1、中3では森住（2004）同様『日本のいじめ』調査の倍以上の認知率であった。男女差では森住（2004）と若干異なり中学1年ではほぼ同じで、中2、中3では10%ほど男子の方が高い結果であった。小学校については6%ほど女子学生の認知率が高く、男女合計の数字は1997年調査の男女合計64%より6%高かった。

Table 2-2のいじめ被害経験は、中学校では『日本のいじめ』調査より低い数字である。中学生でいえば、9～14%に対して本教職課程履修学生は3

～7%のいじめ被害経験で、半分程度の結果であった。ただし、女子学生の小学校時代の被害経験率は男子学生の14%に比べて27%と高い数字であるが、男女計と『日本のいじめ』調査を比べるとほぼ同じ程度であった。女子学生の中学校1年時のいじめ被害経験も11.4%と男子や『日本のいじめ』調査よりも高い経験率である。これらは森住(2004)とほぼ同じであった。

また、Table 2-3にある加害経験率は、小学校の男女計は『日本のいじめ』調査より10%ほど高い数字であるが、その中学生の加害経験は11～19%に対して本調査の学生は6～16%の加害経験率で、これはやや少ない結果であった。これらも森住(2004)とほぼ同じで、教職課程履修学生はいじめ被害経験も加害経験も平均より少ないようだが、女子学生の小学校から中学校1年にかけては若干高いいじめ被害経験があった可能性がある。

Table 2-6およびTable 2-7は、いじめ経験を被害のみ、被害加害、加害のみ群に分けたものである。小学校段階では、森住(2004)同様、男女計で『日本のいじめ』調査と比べ、加害のみ群が12%に対し24%と高く、男子学生の多さ(30%)が目立っていた。中学校段階でも同じ傾向で、加害のみ群が11%に対し17%で、ここでも男子学生が多かった(23%)。両段階とも、女子学生の被害のみ群が『日本のいじめ』調査や男子学生より高く、男子学生の加害のみ群が『日本のいじめ』調査や女子学生より高いという結果であった。

Q2「いじめがあった場合の手段」

Table 3は、いじめの手段について、いじめ学級内認知を報告した学生について、その結果をまとめたものである。表中の「手段」は以下のとおり。「無視」＝仲間はずれにした、無視した。「言葉」＝悪口や言葉による。「暴力」＝殴る、蹴るなど暴力による。「いたずら」＝犯人不明のいたずら・いやがらせ。「その他」＝それ以外のもの。

小学校では「無視」「言葉」によるいじめが多く、森住(2005)と若干異なり、女子学生は92%および65%、男子学生は74%および79%であった。「暴力」は男子学生の方が多く女子学生12%にたいして24%であった。また、中学校でも「無視」64%、「言葉」64%が多く、「暴力」は男子学生の方が多く40%であるが、女子学生も31%と多かった。森

Table 2 1998・1999年度入学生のいじめ認知、被害・加害経験等

2-1 いじめ学級内認知(女子学生105人、男子学生170人)

	小学校	中学1年	中学2年	中学3年	高 校	
女子学生	73.3	43.8	24.8	21.9	8.6	%
男子学生	67.1	45.9	34.1	30.0	14.7	%
男女合計	69.5	45.1	30.5	26.9	12.4	%

『日本のいじめ』見聞経験

	小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	
	17.4	21.3	19.0	18.5	12.4	%

2-2 いじめ被害経験(女子学生105人、男子学生170人)

	小学校	中学1年	中学2年	中学3年	高 校	
女子学生	26.7	11.4	5.7	7.6	3.8	%
男子学生	14.1	3.5	4.1	0.6	0.6	%
男女合計	18.9	6.5	4.7	3.3	1.8	%

『日本のいじめ』被害経験

	小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	
	20.4	16.4	14.2	12.9	9.0	%

2-3 いじめ加害経験(女子学生105人、男子学生170人)

	小学校	中学1年	中学2年	中学3年	高 校	
女子学生	26.7	9.5	1.0	1.0	1.9	%
男子学生	41.2	20.0	13.5	8.2	4.1	%
男女合計	35.6	16.0	8.7	5.5	3.3	%

『日本のいじめ』加害経験

	小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	
	19.3	24.9	18.7	16.4	11.1	%

2-4 いじめ被害経験率(女子学生105人、男子学生170人)

	小学校	中学校	合 計	
女子学生	26.7	18.1	27.6	%(105人)
男子学生	14.1	6.5	18.2	%(170人)
男女計	18.9	10.9	21.8	%(275人)

『日本のいじめ』被害経験率

女 子			15.8	%
男 子			13.1	%
男女合計			13.9	%

2-5 いじめ加害経験率(女子学生105人、男子学生170人)

	小学校	中学校	合 計	
女子学生	26.7	11.4	32.4	%(105人)
男子学生	41.2	28.2	51.8	%(170人)
男女計	35.6	21.8	44.4	%(275人)

『日本のいじめ』加害経験率

女 子			17.5	%
男 子			18.4	%
男女合計			17.5	%

2-6 いじめ被害加害群(小学校)

	被害のみ	被害加害	加害のみ	
女子学生	12.3	26.4	13.2	%(67人)
男子学生	5.3	8.8	30.4	%(139人)
男女計	7.9	15.5	23.8	%(206人)

『日本のいじめ』被害経験率

男女合計	8.1	9.7	12.1	%
------	-----	-----	------	---

2-7 いじめ被害加害群(中学校)

	被害のみ	被害加害	加害のみ	
女子学生	11.3	4.7	6.6	%(105人)
男子学生	2.8	3.4	23.4	%(170人)
男女計	6.1	4.0	17.0	%(275人)

『日本のいじめ』被害経験率

男女合計	7.2	4.3	10.9	%
------	-----	-----	------	---

2-8 いじめ被害加害群(小学校～中学校)

	被害のみ	被害加害	加害のみ	
女子学生	18.9	17.9	14.2	%(106人)
男子学生	5.3	12.9	38.0	%(171人)
男女計	10.5	14.8	28.9	%(277人)

Table 3 校種別にみたいじめの手段（1998・1999年度入学生）

3-1 いじめの手段・小学校（女子学生78人、男子学生119人）

	無視	言葉	暴力	いたづら	その他	%
女子学生	92.3	65.4	11.5	34.6	2.6	%
男子学生	73.9	79.0	24.4	28.6	0.8	%
男女計	81.2	73.6	19.3	31.0	1.5	%

3-2 いじめの手段・中学校（女子学生59人、男子学生95人）

	無視	言葉	暴力	いたづら	その他	%
女子学生	71.2	74.6	27.1	25.4	1.7	%
男子学生	60.0	57.9	40.0	21.1	1.1	%
男女計	64.3	64.3	35.1	22.7	1.3	%

3-3 いじめの手段・高校（女子学生10人、男子学生30人）

	無視	言葉	暴力	いたづら	その他	%
女子学生	80.0	20.0	10.0	10.0	0.0	%
男子学生	60.0	53.3	26.7	20.0	3.3	%
男女計	65.0	45.0	22.5	17.5	2.5	%

Table 4 校種別にみた学級担任の対応（1998・1999年度入学生）

学級内 認知あり	担任は問題を取り上げたことがあるか					
	たいてい	～もある	ない	忘れた		%
小学校	30.6	38.3	18.7	3.8		% (209人)
中学校	22.1	38.7	26.4	12.9		% (163人)
高校	4.3	7.1	70.0	18.6		% (70人)

Table 5 「いじめ」発生の現状認識（1998・1999年度入学生）

	多い	少ない	分らない	
女子学生	66.0	2.8	31.1	% (106人)
男子学生	51.5	8.8	39.8	% (171人)
男女計	57.0	6.5	36.5	% (277人)

Table 6 今後のいじめ状況推移評価（1998・1999年度入学生）

	増える	変化なし	減る	分らない	
女子学生	35.8	37.7	7.5	18.9	% (106人)
男子学生	22.2	60.2	7.6	9.9	% (171人)
男女計	27.4	51.6	7.6	13.4	% (277人)

Table 7 いじめ報道への関心度（1998・1999年度入学生）

	極力得る	たまには	向かない	
女子学生	23.3	75.7	1.0	% (103人)
男子学生	18.0	76.6	5.4	% (167人)
男女計	20.0	76.3	3.7	% (270人)

Table 8 報道・情報への対応（女子学生101人、男子学生166人）

	そのまま	極力保存	図書読む	話し合う	調べた	%
女子学生	63.4	2.0	5.0	35.6	2.0	%
男子学生	66.9	1.2	1.8	32.5	2.4	%
男女計	65.5	1.5	3.0	33.7	2.2	%

Table 9 「いじめへの対応」正答率（女子学生102人、男子学生168人）

	問題1	問題2	問題3	問題4	問題5	%
女子学生	73.5	97.1	97.1	74.5	93.1	%
男子学生	70.8	100.0	94.0	80.4	92.3	%
男女計	71.9	98.9	95.2	78.1	92.6	%

(女子学生の55.9%、男子学生58.3%が全問正解)

住（2005）とほぼ同じく、男女とも小学校の「仲間はずれにしたり無視したりする」ことを中心とし「悪口や言葉による」いじめが目立ち、中学校でもそれを引き継ぐ形であるのに加えて、男子では「暴力」の多さが特徴的であった。

Q3「学級担任のいじめへの対応の有無」

Table 4は、学級内でいじめを認知していた学生に、学級担任が解決のためにいじめ問題をクラスで取り上げたかどうかを、「たいてい」＝たいてい取り上げた、「～もある」＝取り上げたこともある、「ない」＝取り上げたことはない、「忘れた」の4つの選択肢で回答してもらった結果を各学校段階別にまとめたものである。小学校では何らかのかたちで学級担任は対応したと回答している学生は69%で、森住（2005）の50%より大幅に多く、1997年調査の70%と同じとなり、中学校では61%で森住（2005）とほぼ同じ数字であった。

Q4「学級担任の問題解決のための対処方法」（略）

Q5『いじめ』発生の現状認識

Table 5は、現在のいじめの発生状況をどう教職課程履修学生が評価しているかをまとめたものである。現在のいじめの状況を多いと認識している学生は52%（男子学生）から66%（女子学生）で、少ないと評価する学生は3～9%であった。森住（2005）と比較すると、いじめは多いと評価する学生はほぼ同じ57%であるが、女子学生が9ポイント少なかった。そして、いじめは少ないとする学生は森住（2005）とほぼ同じであった。

Q6『いじめ』の今後の推移についての評価

Table 6は、いじめの発生状況が今後どうなっていくと思うかを問うた結果である。「増える」とする学生は22%（男子学生）～36%（女子学生）で、森住（2005）と比べ男女計で10%ほど少なくなったが、減ると楽観的にみている学生は8%にとどまる。「変化なし」と「増える」とを合わせると74%（女子学生）～82%（男子学生）となり、森住（2005）の78～90%とほぼ同じで、男女合計では5分の4の学生がよい方向への変化を期待できないと評価していた。女子学生の「増える」とするものは森住（2005）の54%より減少し、1997年調査の40%と同程度となっていた。

Q7『いじめ』問題報道への関心

Table 7は、いじめ問題に関する報道への関心の

程度を、「極力得る」＝極力その記事を読んだり番組を視聴し情報を得るようにしている、「たまには」＝たまにはその記事を読んだり番組を視聴し情報を得ることがある、「向かない」＝ほとんどまたは全くそうした報道・情報には関心は向かない、の3選択肢からみたものである。積極的に報道等に関心を向け情報をえようとするものは20%で森住（2005）より5ポイント少なかったが、全く関心を向けないという学生は0～4%という極めて少数であった。

**Q8 「『いじめ』問題の報道・情報の受け止め方」**

Table 8は、いじめ問題の報道に接した場合の対応・受け止め方について、「そのまま」＝報道・情報を受けたままにしている、「極力保存」＝報道・情報を極力保存している、「図書読む」＝教育雑誌や「いじめ」の図書など読むようにしている、「話し合う」＝友人や知人と「いじめ」問題について話し合ったことがある、「調べた」＝その他の方法で「いじめ」問題を調べたことがある、という5選択肢（複数選択を含む）の回答をまとめたものである。男女合計の結果で見ると「情報を受けたままにしている」が66%で森住（2005）と同じであり、男子学生67%（4ポイント減）と女子学生64%（9ポイント増）で差がなくなってきた。「友人などと話し合ったことがある」のは34%（6ポイント増）で、ここでも男女差が少なくなってきた。

**Q9 「いじめに対する教師の対応の正誤」**

Table 9は、「いじめ問題」への教師の対応の正誤を問うたものの正答率を記したものである。問題1「弱いものをいじめることは人間として絶対に許されない、という強い認識に立つこと」および問題4「いじめられている子どもの立場に立った親身の指導を行なうことが必要である」を正しい対応としない学生がそれぞれ20～30%おり、1997年調査の倍であった森住（2005）より10ポイント増えており、注意すべき点である。問題3「いじめはどの学校にもおこりうることで常に対応できるようにしておく必要がある」、問題5「生徒が教師に相談しやすい関係を築いておかななくてはならない」、問題2「いじめがあるのではないか」という意識を持っている子どもに悪い影響を与えるのでいじめについての問題意識は持たない方が

Table 10 学級内いじめ認知等と現状認識・推移評価

**10-1 学級内（中学）×「いじめ」発生の現状**

学級：中	多い	少ない	分らない	
あった	61.7	4.5	33.8	% (154人)
なかった	51.2	8.9	39.8	% (123人)
合計	57.0	6.5	36.5	% (277人)

$\chi^2 = 4.0413$        $p = 0.1326$

**10-2 学級内（中学）×今後の「いじめ」推移**

学級：中	増える	変化なし	減る	
あった	29.9	64.9	5.2	% (154人)
なかった	24.4	65.0	10.6	% (123人)
合計	27.4	65.0	7.6	% (277人)

$\chi^2 = 3.3538$        $p = 0.1870$

**10-3 被害経験（中学）×「いじめ」発生の現状**

被害：中	多い	少ない	分らない	
あった	70.0	3.3	26.7	% (30人)
なかった	55.5	6.9	37.7	% (247人)
合計	57.0	6.5	36.5	% (277人)

$\chi^2 = 2.3947$        $p = 0.3020$

**10-4 被害経験（中学）×今後の「いじめ」推移**

被害：中	増える	変化なし	減る	
あった	40.7	55.6	3.7	% (27人)
なかった	26.0	66.0	8.0	% (250人)
合計	27.4	65.0	7.6	% (277人)

$\chi^2 = 2.9322$        $p = 0.2308$

**10-5 加害経験（中学）×「いじめ」発生の現状**

加害：中	多い	少ない	分らない	
あった	68.3	6.7	25.0	% (60人)
なかった	53.9	6.5	39.6	% (217人)
合計	57.0	6.5	36.5	% (277人)

$\chi^2 = 4.4756$        $p = 0.1067$

**10-6 加害経験（中学）×今後の「いじめ」推移**

加害：中	増える	変化なし	減る	
あった	26.7	70.0	3.3	% (60人)
なかった	27.6	63.6	8.8	% (217人)
合計	27.4	65.0	7.6	% (277人)

$\chi^2 = 2.1363$        $p = 0.3436$

**10-7 被害経験×「いじめ」発生の現状**

被害経験	多い	少ない	分らない	
あった	63.9	2.8	33.3	% (72人)
なかった	54.6	7.8	37.6	% (205人)
合計	57.0	6.5	36.5	% (277人)

$\chi^2 = 3.1336$        $p = 0.2087$

**10-8 被害経験×今後の「いじめ」推移**

被害経験	増える	変化なし	減る	
あった	33.3	62.5	4.2	% (72人)
なかった	25.4	65.9	8.8	% (205人)
合計	27.4	65.0	7.6	% (277人)

$\chi^2 = 2.8213$        $p = 0.2440$

**10-9 加害経験×「いじめ」発生の現状**

加害経験	多い	少ない	分らない	
あった	63.7	8.1	28.2	% (124人)
なかった	51.6	5.2	43.1	% (153人)
合計	57.0	6.5	36.5	% (277人)

$\chi^2 = 6.7752$        $p = 0.0338$

**10-10 加害経験×今後の「いじめ」推移**

加害経験	増える	変化なし	減る	
あった	26.6	66.1	7.3	% (124人)
なかった	28.1	64.1	7.8	% (153人)
合計	27.4	65.0	7.6	% (277人)

$\chi^2 = 0.1319$        $p = 0.9362$

Table 11 中学担任の対応と現状認識・推移評価

11-1 中学担任対応×「いじめ」発生の現状

担任対応	多い	少ない	分らない	
あった	56.6	8.1	35.4	% (99人)
なかった	57.3	5.6	37.1	% (178人)
合計	57.0	6.5	36.5	% (277人)

$\chi^2 = 0.6518$        $p = 0.7219$

11-2 中学担任対応×今後の「いじめ」推移

担任対応	増える	変化なし	減る	
あった	27.3	68.7	4.0	% (99人)
なかった	27.5	62.9	9.6	% (178人)
合計	27.4	65.0	7.6	% (277人)

$\chi^2 = 2.8747$        $p = 0.2376$

Table 12 報道への関心といじめ認知等との関連

12-1 学級内(中学)×「いじめ」報道への関心

学級：中	極力	たまには	関心なし	
あった	22.5	73.5	4.0	% (151人)
なかった	16.8	79.8	3.4	% (119人)
合計	20.0	76.3	3.7	% (270人)

$\chi^2 = 1.5008$        $p = 0.4722$

12-2 被害経験(中学)×「いじめ」報道への関心

被害：中	極力	たまには	関心なし	
あった	23.3	73.3	3.3	% (30人)
なかった	19.6	76.7	3.8	% (240人)
合計	20.0	76.3	3.7	% (270人)

$\chi^2 = 0.2388$        $p = 0.8874$

12-3 加害経験(中学)×「いじめ」報道への関心

加害：中	極力	たまには	関心なし	
あった	23.3	73.3	3.3	% (60人)
なかった	19.0	77.1	3.8	% (210人)
合計	20.0	76.3	3.7	% (270人)

$\chi^2 = 0.5459$        $p = 0.7611$

12-4 被害経験×「いじめ」報道への関心

被害経験	極力	たまには	関心なし	
あった	25.7	72.9	1.4	% (70人)
なかった	18.0	77.5	4.5	% (200人)
合計	20.0	76.3	3.7	% (270人)

$\chi^2 = 3.0101$        $p = 0.2220$

12-5 加害経験×「いじめ」報道への関心

加害経験	極力	たまには	関心なし	
あった	18.0	79.5	2.5	% (122人)
なかった	21.6	73.6	4.7	% (148人)
合計	20.0	76.3	3.7	% (270人)

$\chi^2 = 1.6626$        $p = 0.4355$

12-6 中学担任対応×「いじめ」報道への関心

担任対応	極力	たまには	関心なし	
あった	26.3	68.4	5.3	% (95人)
なかった	16.6	80.6	2.9	% (175人)
合計	20.0	76.3	3.7	% (270人)

$\chi^2 = 5.0772$        $p = 0.0790$

Table 13 被害・加害経験と報道情報への対応との関連

報道情報を受けての対応(被害学生70人、加害学生122人)

	そのまま	極力保存	図書読む	話し合う	調べた	
被害学生	52.9	2.9	5.7	45.7	1.4	%
加害学生	64.8	1.6	1.6	38.5	0.8	%
合計	60.4	2.1	3.1	41.1	1.0	%

よい」(誤とするのが正解)は、ほとんどの学生が正解であった(93~99%)。

Q1「中学・学級内『いじめ』認知」とQ5「『いじめ』発生の現状」とのクロス集計およびQ6「『いじめ』今後の推移」とのクロス集計

Table 10-1からTable 10-6は、「中学時代の学級内『いじめ認知』」「中学時代のいじめ被害経験」「中学時代のいじめ加害経験」3質問と、「『いじめ』発生の状況認識」「今後の『いじめ』推移評価」2質問との間の、クロス集計結果および $\chi^2$ 検定結果(以下、 $\chi^2$ 検定結果と有意水準は表の下段に記した)を示すものである。森住(2005)では「中学時代のいじめ被害経験」と「今後の『いじめ』推移評価」との間に有意な傾向が認められたが、今回の $\chi^2$ 検定結果では1997年調査同様いずれにも有意な関連は認められなかった。

Table 10-7およびTable 10-8は、小学~中学時代を通じてのいじめ被害経験と現在の「いじめ」発生の状況認識との関連、および小~中いじめ被害経験と今後の「いじめ」推移評価との関連とを調べたものである。ここでも森住(2005)では「いじめ被害経験」と「今後の『いじめ』推移評価」との間に有意な関連が認められたが、今回の $\chi^2$ 検定結果では1997年調査同様いずれにも有意な関連は認められなかった。

Table 10-9およびTable 10-10は、小学~中学時代を通じてのいじめ加害経験と現在の「いじめ」発生の状況認識との関連、および小~中いじめ加害経験と今後の「いじめ」推移評価との関連とを調べたものである。1997年調査結果では、いじめ加害経験と今後の「いじめ」推移の評価との関連に有意な傾向が認められていたが、森住(2005)では有意な関連は認められなかった。それに対して本調査結果では、両報告とも異なりいじめ加害経験と「いじめ」発生の状況認識との間に有意な関連が認められた(Table 10-9、 $\chi^2 = 6.7752$ 、 $p < 0.0338$ )。加害経験のある学生の方が加害経験のない学生より、現在のいじめの発生状況を多い(12ポイント差)と認識することが窺えた。

Table 11は、中学校学級担任の対応と現在の「いじめ」発生の状況認識との関連、および今後の「いじめ」推移評価との関連とを調べたものであるが、1997年調査、森住(2005)同様、中学校学級担任

の対応と「いじめ」発生の状況認識および今後の推移評価との関連は認められなかった。

Table 12は、中学時代の学級内のいじめ認知、中学時代の被害経験、中学時代の加害経験、小学～中学を通じての被害経験および小学～中学を通じての加害経験それぞれと、「いじめ」報道・情報への関心度との関連を調べたものであるが、これらの中学時代のいじめ認知等も、1997年調査および森住（2005）では「いじめ」報道・情報への関心度との関連は認められなかったが、本調査結果では中学担任の対応と「いじめ」報道への関心との間の関連に有意な傾向が認められた（Table 12-6、 $\chi^2=5.0772$ 、 $p<0.0790$ ）。中学担任の対応があったとする学生ほど報道を極力保存する学生が多いということを示唆するものであった。

Table 13は、小学～中学を通じての被害および加害経験者のいじめ情報を受けての対応を分析したものである。対応の5形態について、そうした対応をとると答えた学生（複数回答を含む）の割合を被害経験70人、加害経験122人を分母として算出した。全調査学生を対象としたものでは66%が「そのまま」（Table 8）で、Table 13のいじめ被害経験者、加害経験者の場合とほぼ同じ60%であったが、1997年調査・森住（2005）の70%とは10ポイントほど異なる。「話し合う」も全学生の34%に対してTable 13では41%で、7ポイントの差であった。ただ、被害学生の「話し合う」と回答した割合は46%で加害学生を7ポイント上回り、1997年調査の24%や森住（2005）の32%よりも多い結果であった。なお、1997年調査で「図書を読む」としたものは被害学生では70%以上あり、加害学生の8%と大きく異なるものであったが、本調査結果では、森住（2005）同様、被害学生、加害学生とも数%にとどまるもので、とくに被害学生の「図書を読む」学生数の違い、少なさが続いて見られた。

## 2.4 考察

本調査が対象とした教職課程履修学生は1998・1999年度入学で、多くが1986・1987年小学校入学、1992・1993年中学校入学、1995・1996年高校入学と考えられる。したがって1997年度入学生でみると、1980年代半ばから1990年代半ばまでは、学校段階でいうと小学校入学から高校入学の時期で、

彼らの児童期・思春期の学校生活はほぼその期間に入っていた。こうした被調査者の学級内のいじめ認知率であるが、まず、1995～1999年度入学生の男女計データ分析の「いじめ学級内認知」等を比較してみると、今回の分析対象である2年における「いじめ学級内認知率」はその前の3年の入学生とほぼ同じで、小学校、中学校で高かったが、1999年度入学生の小学校および中学1年時の学級内いじめ認知率は特に高く、高校の認知率も他の年度と比べて高いものであった。

1998年度入学生（2000年調査）と1999年度入学生（2001年調査）のデータを合算して項目ごとの結果および項目間の関連を調べたところ、1996年度入学生および1997年度入学生とほぼ同様の結果となった。まず、学級内いじめ認知であるが、中学時代の認知率は男女合計で1年40%、2年31%、3年30%と、これまでの調査同様、『日本のいじめ』調査の倍以上の認知率であった。そして、いじめ被害経験は男女計ではこれまでの調査同様『日本のいじめ』調査より低い数字であったが、女子学生の小学校から中学1年での高い被害経験と小学校と中学校で男子学生が加害経験を比較的多く報告していることが特徴的であった。また、いじめの手段や学級担任の対応についてはこれまでの調査同様、男子の中学校での「暴力」の多さが確認されたが女子も多く、「無視」「言葉」も相変わらず多かった。学級担任が何らかの対応をしたのは、小学校では前回報告で50%と少なかったのが1997年調査と同じ70%となり、中学校でも61%とこれまでの調査と同じであった。

いじめの現状を多いと認識する男女学生は6割で、女子学生も66%であったが、森住（2005）より9ポイントほど少なかった。今後のいじめの推移評価についても、男女学生の8割が減るとは考えないのもこれまでと同じ結果であったが、今後増えると回答した女子学生が1997年調査と同じ40%に減少したのも、前回報告の女子学生の被害経験の多さと今回の女子学生の加害経験の相対的な多さが関係しているかもしれない。

次に、いじめ問題の報道への関心等についてもこれまでの調査とほぼ同じであったが、その報道を受けての行動では、被害-加害経験等とのクロス集計結果から違いが見られた。森住（2005）同

様、本調査でもいじめ報道から「図書を読む」学生が少なかったが、「話し合う」とした学生は、被害学生では1997年調査24%、森住（2005）38%に対して、今回は46%で、加害学生も1997年調査・森住（2005）の約30%に対して39%と高い数字であった。また、森住（2005）では被害経験といじめ認識や報道への関心との関連が示唆されていたが、今回の調査結果では加害経験といじめの現状認識との関連がみられた。加えて中学時代の担任の対応といじめ報道への関心との間の関連も示されたわけで、いじめ自殺報道に続く社会問題化したなかで、そこに大人のきちんとした対応がある場合、自らの加害体験も含めて現象を認識し、問題に関心を持ち、話し合う機会が増えている可能性もある。

### 3. おわりに

森田編（2003）<sup>[6]</sup>は不登校の問題の社会学的大規模調査であり、データから得るものも多いが、それ以上に目を引いたのは事例編の背景にあるいじめ問題であった。いじめ関係の見出し以外の「校則・部活などが厳しくて」「人間関係のトラブルがもとで」「“教師”に問題があった」にも被害者がおり、「学校は“いじめ”に対応してくれず」の見出しもあった。広義の不登校事例中、大きな割合を占めるこれらの事例から、学校の責任というより大人の責任を考えさせられた。その点では、本調査結果の「話し合う」学生の傾向は望ましく、その認識をさらに深めることが求められよう。

#### 引用文献・注

- [1] 森住宜司，教職課程履修学生のいじめ問題経験と現在の状況認識，「総合福祉」，第1号，p.93-101，2004年
- [2] 森住宜司，教職課程履修学生のいじめ問題経験と現在の状況認識 — 1998年・1999年調査，「総合福祉」，第2号，p.125-133，2005年
- [3] 島田啓二，「いじめ」の克服と教員養成，「生活指導研究」，4，p.137，1987年
- [4] 調査項目のうちQ1～Q4およびQ7とQ8については前掲島田論文の質問項目を参考に字句上の改訂をして用いた。また、Q9は雑誌「教職課程」1996年8月号掲載のものである。ほぼ同じ調査が1995年・1996年に実施され、その結果は次の論文等にまとめられている。森住宜司，いじめ問題に関する新聞社説と教職課程履修学生の関心，「浦和論叢」，第17号，p.391-410，1997年
- [5] 森田洋司他編，『日本のいじめ—予防・対応に生かすデータ集』，金子書房，1999年
- [6] 森田洋司編，『不登校—その後 不登校経験者が語る心理と行動の軌跡』，教育開発研究所，2003年

#### Abstract

The purpose of this paper is to examine the students' views on school bullying problem. The data of the students of a teaching profession course in 2000-2001 were analyzed and compared with the data of Morizumi's report (2005) that were researched in 1998-1999. 60% (70% in the 1997 research) of the students think that the incidence of school bullying is high rate in the present elementary schools and junior-high schools. 30% (40% in the 1998-1999 research) of the students also think that the incidence of school bullying keeps high or that the rate of school bullying increases in the future. No relationship between the awareness of bullying behaviors and their interests in the news of bullying was found as well as in Morizumi's reports (2004 and 2005).

**Key Words:** school bullying, teaching profession course, student awareness, bully/victim experience, estimation of fluctuation